

〈論文〉

## *The Female Quixote* に見る “lover-mentor” としての Glanville

阪 上 敦 子

### Abstract

This paper is a sequel to the thesis in *ASPHODEL* no.44. In *The Female Quixote* (1752), Glanville, heroine Arabella's fiancé, is defined as a “lover-mentor.” However he is always at the mercy of her and can not reform her failed moral vision. As a result, Arabella's cure is fulfilled not by Glanville, but by a learned Doctor who suddenly appears. Although the story has a happy ending, Glanville appears to be a nominal “lover-mentor” whose role as a fiancé does not seem significant.

The purpose of this paper is to find out Glanville's share in the story and define him as a key person essential to the novel.

Most critics discuss Arabella's reform and marriage as disappointing and even tragic; it means the subordination in the patriarchal society. However it can be suggested that Glanville, who highly values and admires Arabella's intellect, is not a typical “lover-mentor” only to make her reform. If we look at their marriage in a positive view, he is the ideal person for Arabella to marry. For, by his support, her future will be brighter and much more progressive than the women of the day. Furthermore, Glanville may be, in a sense, “a utopian husband,” who Lennox hopes to have. Such a view may reflect her disappointing marriage as well as her dream of a “companionate marriage,” which became familiar in the mid-eighteenth century.

## 序

本編は『アスフォデル』第44号掲載論文の続編である<sup>1</sup>。前稿では Glanville は “lover-mentor”、つまり若いヒロインを改める指導者の役割をする婚約者であると思われたが、作者 Lennox が物語の終結を急いだため、mentor という重要な役割を果たせずヒロインに翻弄されるばかりの人物像になったという推論を提起した。

Jane Spencer はこの “lover-mentor” という役割について、“Davys is at the beginning of a long line of women writers who create coquettish heroines and lover-mentors to reform them.” (146) と述べて、Mary Davys (1674-1732) の *The Reform'd Coquet* (1724)<sup>2</sup> を “lover-mentor” が登場する教訓小説の出発点であるとした。そして Charlotte Lennox (1729, 30-1804) の *The Female Quixote* (1752)<sup>3</sup> をその延長上に位置づけ、ヒロイン Arabella の婚約者 Glanville を上述の “lover-mentor” であるとした (187)。

だが、実際のところ、彼は物語の結末でロマンスに傾倒する Arabella を覚醒させる役割をせず、彼女から婚約者とも認められず、“lover-mentor” としての存在感はなかった。前稿でも指摘したようにこの理由として3つ挙げられるだろう。まず、Samuel Richardson (1689-1761) からの指示で、Lennox は創作の後半でこの物語を早急に仕上げる必要に迫られた。さらに当初 Lennox が3巻本での出版を想定していたのに Richardson から2巻本に削減するとも言われる。そして結末のつけ方を執筆の最終段階になって Lennox が悩んでいたとの事実もあり、Samuel Johnson (1709-1784) が最終章の一部を書いたとする説もある。これらの出版事情が Glanville という人物の設定自体に影響したと思われるのである<sup>4</sup>。

Glanville のプロットに仮に副題をつけると、「Glanville の婚約者獲得までの紆余曲折の道のり」とも呼べるだろう。だが肝心の結末までに「起承転

結」の「転」に向かういくつかのエピソード、または明確な「転」の役割をなす決定的なエピソードが上記の理由で欠落したのではないかと前稿で指摘した<sup>5</sup>。このため結果的に Glanville は Lennox が執筆当初に想定していた人物像とはちがう人物になったという可能性も否定できない。

ではたして Glanville は Spencer が分類するような “lover-mentor” と言えるのだろうか。もちろん Lennox には “lover-mentor” という概念はなく、最初から Glanville にその役割を意識的にさせるつもりは無かっただろう。むしろセルバンテス (1547-1616) の『ドン・キホーテ』(前編1605、後編1615) になぞらえて *The Female Quixote* との題名にしたのだから、ヒロインのみならず Glanville も意図的に笑われる対象であって、ヒロインに翻弄される道化的な役をさせて彼女の愚行を補強する役割をさせたとも取れる。そして表面上は “lover-mentor” の立場だが、覚醒させる重要な役を最初から担っていなかったと考えると納得がいく。だが少なくとも Arabella の父が決めた婚約者であるのだから、彼女の覚醒のために奔走する姿を Lennox はもっと描いてもよかったのではないだろうか。

では Lennox が Glanville に期待した役割とは何だったのだろうか。まずは Glanville と比較するために時代を少しさかのぼり、この作品より30年ほど前に書かれた前述の Davys の作品から「初代 lover-mentor」の特徴やヒロインとの関係について探ってみることにする。

## I ヒロインと lover-mentor の模範的な関係

Davys の *The Reform'd Coquet* (1724) は出版後好評を博して1760年までに7版が出た。この作品で “lover-mentor” の役割をするのは Alanthus という若者である。彼は Formator という老人に変装し、ヒロインの後見人と mentor の二役をする。Davys は lover と mentor というふたつの役割を、変装という手段を用いて若者と老人に振り分けて演じさせた。また若者 Alanthus の変装以外にも、悪党が女装してヒロインに接近するなど、非現

実的な設定も多いが、読者を意識した娯楽性にも富む。

若いヒロインが行動力を発揮して、mentor の的確な助言で次々と襲いかかる放蕩者や悪党たちをやっつけていくその過程は痛快であり、Davys が Preface で、“... which will, I hope, give them an hour or two of agreeable Amusement.” (254) と述べるように、読者の好奇心を呼び起こし結末への期待感を膨らませてくれる。

ヒロインの Amoranda は積極的で行動力のある女性である。幼少からちやほやされて成長しプライドが高いという欠点はあるが、“I’ll throw in my Counter-Plot among them and see who will come best off.” (267) とあるように、悪党達や放蕩者を撃退するすべを自ら考え出して実行する。

物語の終盤、屋敷内で火事が起こり Formator の変装が明らかになってしまう。ヒロインが恋した若者が実は mentor 役の老人と同一人物であったと分かる。読者は劇場で観る風俗喜劇の大団円のようなハッピーエンドと謎解きに満足感を覚えるのである。

物語の最初に、突然後見人としてこの Formator が登場すると、Amoranda はこの先、自由を束縛されないようにとっさに妥協案を口にする。そして扱いにくく気難しいであろう老人の Formator に先制攻撃して次のように釘を刺して宣言する。

I find, Sir, I am no longer my own Mistress, but am now to live under your Restrictions; I promise you I will always listen to your Advice and take it as often as I can; but I hope, Sir, you will remember I am gay and young, and you grave and old, and that the Disparity in our Years may make as great a one in our Tempers: I’ll therefore make a bargain with you, if you will bear with a little of my youthful Folly, I will bear with a great deal of your aged Sagacity, and we will be as agreeable to one another as ‘tis possible for Age and Youth to be. (267)

この老人を後見人として受け入れざるを得ないなら、彼の監視下でも若い女性として許容される範囲内の自由は確保しておこうとする Amoranda の積極的な自己防衛姿勢がここから見てとれる。この前提には、この見ず知らずの老人は Amoranda の叔父が推薦したという事情がある。このためコケットではあるが、ヒロインは、Formator への態度において礼を失するところもなく、その忠告にも真面目に耳を傾けて従い、心を開いて自分の気持ちも素直に述べる。

Formator は mentor の役割も直接試みる。毎日ヒロインを尋ねては彼女のコケットな性格を自分の好む方向に改めようとする。Amoranda は “I am resolved I will never think it [flattery] a pleasure again, because you dislike it in me . . . .” (292) と返答して、彼の言葉にすぐ素直に同意する。ヒロインとの間には歴然とした上下関係の他、信頼関係も成立している。だが、“. . . everything you say pleases me, because I know it comes from an honest Heart” (293) とあるように、いささか信頼しすぎて従順すぎる感もある。Amoranda は彼の言動にまったく疑問も挟まない。そして反抗も抵抗も無視もしない。最初は老人ということでちょっと躊躇するが、“I now promise to be governed in a great measure by you . . . I will use you with deference, and bring myself to comply with your Desires as far as possible.” (268) とあるように、彼の言葉には全幅の信頼を置く。

読者には “An old Gentleman!” (267) という Amoranda の一言があるのみで、この Formator の身分や容姿については提示されていない。彼の人格を叔父は手紙で、“. . . for though he is an old Man, he is neither impertinent, positive, or sour.” (267) とも記す。読者は彼が柔軟で若者にも的確な忠告ができる人物だというイメージを抱く。実際、老人 Formator の言動に間違いはなく、Amoranda は正しい方向へと導かれる。この背景には堅固に確立した家父長制社会の枠組みがある。しっかりと機能

したこの社会では、登場人物は許容範囲内に自らを収めて両者の立場は最後までぶれず逸脱することはない。

物語の後半、Alanthus が老人の Formator だったと分かったとき、驚くヒロインに彼は次のように弁解する。

I came to you, disguised like an old Man, for two reasons: First, I thought the sage Advice you stood in need of would sound more natural and be better received from an old mouth than a young one; next, I thought you would be more open and free, in declaring your real Sentiments of everything to me as I was than as I am. (316)

まず、老人の意見の方が聞く耳を持ってもらえると思ったことを述べる。読者も Formator が老人であるから見識や判断力があるという設定を当然のこととして受け入れる。もし若者の Alanthus が叔父の手紙を持参して後見人の代理をするという設定なら、彼へのヒロインの信頼度は下がり読者も現実味を感じない。18世紀社会ではジェンダーによる序列で男性の優位と女性の服従は当然であり、男性は女性よりも理性的で知的能力があるとされていた。このため mentor には男性で物事を熟知した賢者、それも老練な指導者といったイメージが相応しかった。

次に、若いヒロインが率直に心のうちを曝け出すには老人の方が打ち明け易いだろうと Alanthus は述べる。ここからは、若い男女の打ち解けた会話は Davys の時代にはまだ一般的ではないことを想起させる。50年ほどのち、Jane Austen (1775-1817) の *Northanger Abbey* (1818) は、実際には1798年に執筆されたのだが、ヒロインの Catherine を最後に覚醒させたのが若い恋人 Henry の言葉であるのとは大きな相違がある。

さて、実際の Formator は若者であるから当然行動的な mentor である。ヒロインと一緒に積極的に悪党を懲らしめる。例えば Amoranda は自らに

言い寄る放蕩者 Sir Lofty を逆に騙して、彼に騙された別の女性 Altemira と結婚式を挙げさせる (288-289)。このとき Formator は Amoranda と共に実行役になるが、こうすることで彼はヒロインの信頼を得てその言葉に説得力も増す。

この作品の “lover-mentor” は、lover、mentor、そして後見人と三役を同時に演じることでいわばヒロインのすべてを把握している。ヒロイン自身がいくら行動的な女性で、悪者達の裏をかくような策略を計画し彼らをやっつけるほどの実行力に富んでいても、彼女は釈迦の手の上の小さな孫悟空のように老人 Formator の意図する方向へと動かされている。

Amoranda が悪者たちに囚われたとき、危機一髪のところまで登場する若者 Alanthus は、まさに「白馬の騎士」である (298-299)。彼は Amoranda を悪党たちから済んでのところで救出する。だが、これも救出に向かうタイミングを見計らったの登場であり、Alanthus としての出番を計算しているのである。実際、Amoranda が窮地に陥っているのに、最初は Amoranda を見捨てるふりをして、“I am sorry for you, but I am no Knight — Errant, nor do I ride in quest of Adventures; I wish you a good Deliverance . . . .” (299) と冷淡を装ってさっさと馬で去っていく。だが Amoranda は悪者達からすんでのところまで助けてくれたこの若者に恋する。彼女は素直な恋心を Formator に “Oh Formator, had you seen the fine Man, how graceful, how charming, how handsome . . . I think I’m mad . . . .” (302) と述べて、なんと当の本人 (Alanthus) に顔を赤らめながら告白することになる。片や *The Female Quixote* では Glanville は Arabella から lover として認められるために積極的には行動せず、彼女の救出も後手にまわるのだが、ここではヒロインの心を射止めるために Alanthus はより効果的なタイミングを狙って Amoranda の前に現れるのである。

Lover と mentor を若い同一人物にすることは、男女の恋愛感情の進行と

ヒロインへの道徳的な指導が平行することになり、ストーリー展開や人物造形の上でかなり制約が出て無理がある。このことは Elizabeth Inchbald (1753-1821) の *A Simple Story* (1791) に見られる Doriforth/Elmwood 卿の例のように、後見人で mentor の役をするはずが lover になってしまった場合を見ても明らかである<sup>6</sup>。このようなことから、読者の持つそれぞれの役柄のイメージに合う人物像、つまり lover には若者を、そして mentor や後見人には賢明な老人をという Davys の人物設定は分かりやすい。

*The Reform'd Coquet* の教訓物語としての改心への道すじは単純明快である。欠陥のあるヒロインは lover-mentor の言葉に素直にすぐ同意して改めるので、mentor 役は手こずることはない。たとえ Amoranda が彼の助言に従わず悪党達のわなにはまっても、Formator にはこの事態は予測可能であり対応も早い。また彼には性格的な欠点や脆弱さはなく改心への手だてに苦悩することも無い。

## II *The Female Quixote* での mentor 役の不在

では、改めて *The Female Quixote* に戻ると、Lennox が結末のつけ方で非常に悩んだという事実は、Arabella の覚醒を実行して結末を締めくくするのに相応しい mentor 役が作中にはいなかったことを意味する。登場人物の中で Arabella を覚醒できるほどの人物は、Countess と叔父で後見人の Sir Charles であろう。

まず、“lover-mentor” とされる肝心の Glanville はと言うと、いつも Arabella の言動に振りまわされて mentor 役を結末で急に担うのは人物造形の上で無理がある。“Glanville continued silent, with his Eyes bent on the Ground, for indeed he was asham'd to look up . . . .” (303) とあるように、彼は Arabella の言動に恥ずかしさのあまり、独り庭に逃げ出したり床をみつめたりとなすすべもない (303)。だが、すぐその後、“Mr. Glanville, who was charm'd into an Extacy at this sensible Speech



of Arabella's, forgot in an Instant all her Absurdities.” (304) ともあるように、Arabella の堂々とした論理を聞くと彼女に惚れ直すのである。若い Glanville は精神的に未完成なモラトリアム状態で、Formator/Alanthus のように規範となるべき確固不拔の信念がなく自らの感情にあっさりとは流される。

彼が Arabella の覚醒を直接試みる場面は物語のかなり後半でやっと見られるが、ロマンスからの例を多用した Arabella の反論に負けて論破されてしまう (319-321)。女性より賢く理性的とされたはずの男性がいつも簡単に女性に言い負かされるのである。

次に父親の Sir Charles だが、彼は家長であり Arabella の叔父で後見人でもある。その判断は的確で価値基準もぶれない。例えば Arabella の言動についても、“She is very handsome, I confess . . . but I cannot think so well of her Wit as you do; for methinks she talks very oddly, and has the strangest Conceits!” (64) とあるように、Arabella を客観的、且つ冷静に分析する。そして将来の夫となる Glanville の力で Arabella を覚醒させねば、と父親として忠告する (64)。Glanville は父親からの厳しい現実直視の指摘のため息をつく。Arabella が目上の Sir Charles に無礼な言動をとったことで彼は激怒するが (63)、その一方で、Arabella が奇妙なのは whim (気まぐれ) の時だけだ、と弁護してその博学ぶりや賢明さを褒める。彼女の弁論のうまさにも感心して男なら国会議員にでもなれたのに、とも残念がる (311)。

Sir Charles は家長としての対応も的確であった。息子の Glanville が起こした Sir George への刀による傷害事件が町中に知れ渡り、彼は事件の事後処理や Sir George が万一の時の対応まで考える (366)。このようなときも沈着冷静で父親としての存在感もある。

では Countess はと言うと、彼女は Arabella が尊敬する人物であり、登場場面は少ないが重要な人物である。Countess と会う前から Arabella は

彼女には特別な関心を持ち、その言葉の一言一句が Arabella の心の奥に深く響く。Glanville と Countess が同じ内容のことを Arabella に言っても Glanville の言葉には説得力がない。若い彼の言葉には人生経験から滲み出た重みがなく、年輩の Countess の言葉のように Arabella の心を打つことがない。例えば、Glanville は “Ah for Heaven’s sake, . . . endeavouring to stifle a Laugh, do not suffer yourself to be governed by such antiquated Maxims! The World is quite different to what it was in those Days” (45) と笑いを堪えて今は昔とはちがうと述べる。一方の Countess も同じ内容を、“’Tis certain therefore . . . that what was Virtue in those Days, is Vice in ours: And to form a Hero according to our Notions of ‘em at present, ’tis necessary to give him Qualities very different from *Oroondates*.” (329) と述べて、時代によって考え方も価値観も変わるものだと静かに諭す。Arabella は Countess の言葉には謙虚に耳を傾けて心打たれる。さらに、“The Countess’s Discourse had rais’d a Kind of Tumult in her Thoughts . . . .” (329) とあるように、Arabella は自らを恥じつつ、当惑しながらも真摯に聞く耳を持つ。この姿勢は Glanville の言葉に対する態度にはないのである。

Glanville はこの Countess に Arabella を教化する mentor 役を期待したが、母が病気という理由で慌てて旅立ってしまう (330)。Lennox は Countess に mentor の役をさせず、このような不自然な中途半端な退場を彼女に強いたのである。前述の Spencer は教訓物語でヒロインを教え導く人物として、人生経験豊富で賢明な女性なども多いと指摘しているが (145)、Countess はまさにこの役の人物であったと思われる。ほんの少ししか彼女は登場しないが、逆にこのことは彼女を重要人物として是非とも少しだけでも登場させたいという Lennox の強い意思表示とも取れる。

Countess についての評価は Glanville と Sir Charles とでは親子でも正

反対である。Glanville は、“He had always been a zealous Admirer of that Lady’s Character, and flatter’d himself that the Conversation of so admirable a Woman would be of the utmost Use to *Arabella*.” (323) とあるように、彼女に全幅の信頼を置き、人生の先輩として *Arabella* を改めてくれることを期待する。一方の父は Countess が理解できず、*Arabella* と同じく奇妙な人種だと思うのである (330)。Countess は *Arabella* のロマンスの世界観を理解した上で彼女の目線に自らを置いて対話ができるが、Sir Charles はロマンスの世界を現実とする *Arabella* とは対話にならない。彼女の賢明さは認識しているが、ロマンスを現実と受け入れるだけの柔軟さはない。

ロマンスが *Arabella* にとっての現実であるため、彼女は家父長制による秩序が構築されている実社会の枠組みに入りきれていない。このため Bath の社交界にデビューしても、大昔のロマンスの女王の服装でその場の女性たちの好奇の対象にされる (263)。また、彼女は後見人である叔父の言葉に特に従順を装わないし彼を怒らせてもまったく罪悪感を抱かない (63, 199)。これは前述の Davys の作品で *Amoranda* が Formator に示す従順な態度とは対照的である。“I tremble indeed to think how nearly I have approached the Brink of Murder, when I thought myself only consulting my own Glory . . . .” (381) と *Arabella* は最後に告白するように、自分の妄想から他人の命をも危険にさらしたという事実を Doctor から指摘された時、身の回りの出来事を初めて現実として認識するのである (381)。そしてロマンスの世界は単なる作り話の世界なのだと Doctor から論破される (378-381)。

さて、興味深いことに、この Countess と Doctor のどちらにも具体的な氏名がない。このふたりは *Arabella* の覚醒や教化という目的のためだけの登場人物であり、社会的な地位が高く、賢明で教養ある人物であることを読者に印象づけるのみである。Lennox は Glanville のような若者や Sir

Charles のような権威ある家長や後見人でなく、Countess のような Arabella が精神的に頼れる同性に mentor という大切な役割を託したかったのではと推測する。

このような女性作家としての Lennox のジレンマを払拭するうまい方法を最初から採ったのが前述の Mary Davys である。ただ *The Reform'd Coquet* では、mentor 役の若者 Alanthus は性格的に完全無欠で Glanville のような人間的な脆弱さが見られず、現代の読者には面白味に欠けるとも思える。Glanville は父親の Sir Charles から精神的な自立を果たせず、その未熟さはたえず Glanville 自身の内面のぶれにもつながっている。堅固な家父長制社会の枠内にあって、若者が lover と mentor のふたつの役割をひとりで掛け持ちするのは無理がある。Lennox の時代、まだ Sir Charles や Doctor のような老練で賢明な男性を差し置いて、未熟な若者の Glanville に mentor の役をさせるつもりは彼女には最初からなかったのではないだろうか。では Glanville が直接 Arabella の覚醒に関与せず、また彼が単なるピエロ役ではないのなら、Lennox が彼を冒頭から婚約者として作品に登場させた意図はどこにあるのだろうか。

### III Glanville の存在意義

Lennox が Glanville に mentor をさせなかった理由をここで改めて考えてみよう。Mentor としての鍵は彼がいかに Arabella のロマンスと向き合うかである。Glanville のロマンスへの興味のなさはすでに最初から明白である。『ドン・キホーテ』で主人公の書籍はすべて焚書の刑に遭い、書斎も跡形もなく壁が塗り固められてしまう（前編1-112-131）。他方、*The Female Quixote* では、Arabella の父が怒ってロマンス本を焼却しようとするのを、Glanville が危機一髪で止める（55）。

Glanville が冒頭で Arabella の書籍を救うこの一件は彼のその後の中途半端な姿勢を象徴するエピソードであり、彼のあいまいなロマンス観を早い

段階で読者に強く印象づける。彼は Arabella と話のつじつまを合わせるため、彼女が持参したロマンス本を読んだとウソをつく (49-51)。ロマンスの持つ Arabella への影響の大きさに驚きつつも、Arabella のすばらしさに目が向いて彼女が好むのなら妥協しておこうとするのである。実際、彼は Arabella に向かって頭ごなしにロマンスを否定することはない。“... in Reality, he was contemplating the surprising Effect these Books had produced in the Mind of his Cousin; who, had she been untainted with the ridiculous Whims . . . was, in his Opinion, one of the most accomplished Ladies in the World.” (50) ともあるように、彼はロマンスさえなければ彼女は世界で最も教養のある女性のひとりであるとも思っていた。

Glanville による覚醒は彼がロマンスを否定しないかぎりありえない。これは Arabella の言動に柔軟な Glanville には困難であった。Glanville がロマンスと正面から対峙しなければ家父長制社会の枠内で夫に従順な妻という社会的なスタンスを彼女に求めることはできなかった。当時女性は男性より知性が劣った存在であるとされていたから、論理力を駆使して多弁な Arabella の言動を封じ込めるぐらいのことは男性の Glanville には必要だった。

だがここで見方を変えて、Lennox が翻弄されるばかりの Glanville を「婚約者」という強力な切り札として最後まで温存したのは、Arabella の欠陥を改める導師ではなく、彼女を明るい将来へと導く導師として温存していたとは考えられないだろうか。女性の教育という面から Arabella を論じた Sharon Smith Palo の次のような指摘は大変示唆に富むものである。Palo が、“Arabella’s romance reading proves to be the foundation for the development of her superior intellect and imagination.” (205) と述べるように、Arabella は成長期に城で独りロマンスを多読したことで、世間の女性たちのように遊興に染まらず、むしろ思考力を深め知的に優れた女

性になる。他方、Miss Glanville に代表される女性たちが受けた当時の淑女向けの教育、いわゆる “accomplishment” は女性達の知性の向上には役立たず、遊興に興ずるだけの世俗的な女性を育成した。Glanville は知性溢れる Arabella が気に入っていたのである。

これまでの多くの研究では、Arabella が覚醒して Glanville と結婚することは現実の社会に彼女が屈服することであり、敗北であるとする意見が多い。例えば Laurie Langbauer は “when she abandons romance at the conventionally happy ending, she is trapped again, into marriage and submission.” (44) と述べ、Arabella の結婚は敗北であるとしている。Ellen Gardiner はさらに “we can read Arabella’s marriage as a form of death.” (9) とも書いて Glanville との結婚をネガティブに評価してヒロインの死と同等であると断じている。これらの指摘では彼女は巨大な家父長制社会に飲み込まれて、名もないひとりの女性としてこの先、夫 Glanville に従属する一生を送るのである。

だが、[Glanville との結婚イコール不幸] という否定的な読み解きに対して、Palo は Arabella を女性の教育という面から、ロマンスの多読を肯定的に捉えている。多読により Sir Charles も評価するほどの知性を持ち、Glanville をも即座に論破したのである。一般の女性教育とはちがう教育のおかげで彼女は男性とも公の場で同等に議論できるほどの理性的な女性に成長する。最後は Doctor による覚醒ではあるが、ロマンスからも解放されて彼女を唯一理解する Glanville と結婚する。このことは新しく踏み出す現実社会で社会的にも活躍の場が広がり、女性としてのステップアップを意味する。決して惨めな隷属状態に成り下がる訳ではない。Palo は、 “. . . marriage to Glanville becomes the primary arena in which Arabella will employ her superior intelligence.” (228) と記すように、Glanville との結婚という選択は彼女には明るい未来への窓が開けて幸せな人生へと通じるものだとする。これは女性読者には大変肯定的な受け入れ易い解釈であ

る。

このようなロマンスの多読を肯定的に捉える Palo の解釈を論拠に、Glanville 自身の存在意義をここで再検討してみよう。彼は Arabella に振り回されてはいたが、俗世の悪習に染まっていない知的に優れた Arabella に新鮮さを感じて愛していた。人前でのロマンスに由来するおかしな言動さえなければ、たとえ彼女に論破されても Glanville には今のままの彼女でよかったのだ。そのままの彼女を受け入れて結婚することこそが最良で、彼自身がわざわざ無理に mentor をする必要性はない。このような理由から Lennox は Glanville による Arabella の覚醒の場面を作らず、むしろ彼が弁護する場面ばかりを描いたとも取れる。

Lennox は現実には経済能力のない夫に一生悩まされ、晩年になってやっと離婚するが、死ぬまで経済的には困窮した。だがこの作品を執筆していた頃は結婚後、数年しか経たず20歳ほどの若さだった。まだまだ人生に対して希望を持ち明るい未来を切望し、より良い結婚生活に期待感を抱いていただろう。Arabella の未来についても、同性として希望を持てる明るい展望を心の中で願っていたとしてもおかしくない。

現実の Lennox は20歳前後の1747年、Alexander Lennox と結婚した。彼は London の印刷出版業者 William Strahan の元で働いていたが、Strahan とそのパートナー Andrew Millar は共に Samuel Johnson の知り合いで、この縁で Lennox は Johnson と知り合った (Small 7)。

1750年、初めての小説 *Harriot Stuart* を出版して成功する。そしてこのことで彼女は Johnson に評価され、夜通しの盛大な祝賀パーティーを開いてもらっている (Small 10)。一躍文壇で名前が知られて、Johnson などの有力な男性作家たちや印刷出版業者、さらに Orrery 伯爵などの支援を得る。だが一方では Lady Mary Wortley Montgu (1689-1762) やブルーストッキング派の女性たちなどからは嫉妬されることにもなる (*DLB*39 307) (Small 7-9)。このように彼女の作品は広く世間で評判になるが、彼女自身は一部の

同性からは好意的に受け入れられることはなかった。

若い Lennox は生計のため、文壇での生き残りをかけて *Harriot Stuart* の次のヒット作を目指して模索していただろう。だが現実には Johnson や Richardson が執筆中に助言を与え、さらに Henry Fielding (1707-1754) が好意的な書評を発表しているという事実からも分かるように<sup>7</sup>、男性たちのバック・アップがあってこそこのヒットであった。実際、Lennox の不安に反して出版業者の Millar が出版に同意したのも Richardson の後押しがあったからである (Isle 421)。つまり、Lennox の成功にはこれらの男性作家や印刷出版業者が不可欠であった。

片や女性作家としての個人的な想いは結末に集約したとも言える。実際、この部分を書き上げるのに Lennox が大変苦勞したことも事実である。駆け出しの女性作家という弱者の立場と、ひとりの女性としての主張の両方の狭間で、どのように自らの意思を作品に込めるかも模索していたと考えられる。結末で *Arabella* を覚醒させて寡黙で従順な当時の模範的な女性に変身させたことは、形の上では社会に迎合した無難な教訓物語になったことを示す。これは世間から批判を受けず、自身の保身につながり女性作家としては安全な策であると言えよう。

結局、Lennox は教訓物語の体裁を表向きは採りながら、Lennox のみならず女性読者が喜びそうなヒロインの明るい結末を暗示する展開を結末で示した。物語の末尾の二組の結婚についての対照的な記述はそれを暗示する。

We chuse, Reader, to express this Circumstance . . . that the first mentioned Pair [Sir George and Miss Glanville] were indeed only married in the common Acceptation of the Word; that is, they were privileged to join Fortunes, Equipages, Titles, and Expence; while Mr. Glanville and Arabella were united, as well in these, as in every Virtue and laudable Affection of the Mind. (383)



Sir George と Miss Glanville の結婚に父は同意する。これは Miss Glanville の片思いによるが、彼女の兄、Glanville が Sir George に重傷を負わせたことへの償いでもある。Sir George も Glanville に襲われたのは自らの悪巧みの結果であり、世間体もありこの結婚に同意せざるをえない。いわば相互の愛情にもとづく結婚ではないので、この記述にはまったく温かみはなくおさなりであり、将来の破局か冷たい結婚生活を予感させる。一方の Arabella と Glanville の結婚は、彼女の父が生前に決めたとはいえ、Glanville が Arabella の人間的な魅力、内面の賢明さに引かれていたので、18世紀に増加した個人的な愛情に基づく新しい結婚形態、いわゆる「友愛結婚」(companionate marriage) のモデルカップルとも言える。18世紀には自己主張する多弁な女性疎んじられたが、そのような Arabella が逆に Glanville には新鮮であり、人間として尊敬に値する女性であると感嘆し愛したのである。

#### 結語

この時代が求める女性像は、きついコルセットを着用し物憂げに青白い顔つきですぐに気絶するといった弱い受け身的なイメージであった。そして繊細で控えめ、慎ましい女性が理想とされた。だが、Lennox や Davys の描くヒロインはどちらも主体性を持った個性豊かなヒロインである。一方は誇り高い coquet、他方はロマンスへの傾倒という欠点はあるが、どちらも賢明な知性溢れる女性である。

Arabella の結婚という結末は Palo によれば、決して落胆するような悲劇的な終わり方ではない。Glanville の理解により Arabella は家庭内や、そしてある程度は社会においても自由に発言することが許されるだろう。むしろ Davys の作品での Alanthus と Amoranda の結婚より明るい発展的な未来がふたりには開ける可能性を残している。なぜなら Davys の作品では、後見人の Formator の言葉に Amoranda はいつも従順である。彼も、

“Formator had by a daily application endeavoured to form Amoranda’s mind to his own liking; he tried to bring her to a true taste of that Behaviour which makes every Woman agreeable to every Man of Sense.” (291) とあるように、毎日彼女を改めようとする。彼は結婚することでヒロインを一生指導する立場になる。将来的な可能性を想像すれば、結婚しても Amoranda は老人の変装をやめて夫となった Alanthus の言葉に相変わらず従順であり、後見人で mentor であった上下関係が結婚後もそのまま継続される。彼によって coquet を改められた Amoranda は従属的な女性へと矯正されたことに他ならない。

18世紀に入り、結婚は相互の情愛にもとづく友愛結婚へとますます移行していく。*The Female Quixote* の出版は Davys より30年あまりのちの18世紀半ばであり、友愛結婚は当時の若い女性読者の憧れだっただろう。女性読者の共感を引き出すことが、購買力アップへの近道だとする Lennox の作家としての戦略も見え隠れするが、執筆時の若い Lennox が、自分のことを尊重し高めてくれる優しい夫や、男女が共に理解し合う友愛結婚のようなカップルへの憧れを自身が持ち、実生活からの現実逃避か、または理想像として心に抱いて作品を書いたとしてもおかしくないだろう。Sentimental Novel が一世を風靡する前の1750年台初頭、振り回されているように見えてもじっと我慢して待っていてくれる優しい男性像に女性読者は親しみと共感を覚え、そのような男性の出現を切望したのではないだろうか。いわば Glanville は現実にはいない Lennox が心の中で期待する男性像だったとも言える。この Arabella と Glanville との結婚は男性中心の文壇で作品を書く Lennox の、うちに秘めたささやかな抵抗か自己主張とも取れないだろうか。

註

- 1 拙稿「*The Female Quixote* に見る翻弄された婚約者 Glanville」(*ASPHODEL* 44、同志社女子大学英語英文学会、2009) 40-57を参照のこと。
- 2 Mary Davys の *The Reform'd Coquet* からの引用は Paula R. Backscheider and John J. Richetti eds., *Popular Fiction by Women 1660-1730 An Anthology* (Oxford: Oxford UP, 1996) に拠る。この作品からの引用は括弧内に頁数を示す。
- 3 Charlotte Lennox, *The Female Quixote or The Adventures of Arabella* (Oxford World's Classics, Oxford: Oxford UP, 1998) この作品からの引用は括弧内に頁数を示す。
- 4 このあたりの執筆当時の事情については前稿でも触れたが、Isles や Brack 及び Carlile の論文に詳しい。
- 5 この点は *ASPHODEL* 44 (同志社女子大学英語英文学会、2009) 53を参照のこと。
- 6 拙稿「Elizabeth Inchbald の *A Simple Story* についての一考察—Dorriforth 神父／Elmwood 卿の仮面と実像—」(*ASPHODEL* 41、同志社女子大学英語英文学会、2006) 35-52を参照のこと。
- 7 Fielding は1752年3月24日付の *The Covent Garden Journal* no.24にこの作品の書評を書いた。またその他 nos.18, 20, 22にも広告が掲載された (Fielding 158)。

参考・引用文献

- Backscheider, Paula R. ed., *Revising Women — Eighteenth-Century “Women’s Fiction” and Social Engagement*. Baltimore and London: The Johns Hopkins UP, 2000.
- Backscheider, Paula R., and Richetti, John, J., eds., *Popular Fiction by Women 1660-1730 An Anthology*. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Beasley, Jerry C. “Charlotte Lennox” *Dictionary of Literary Biography*. Ed. Martin C. Battestin. 39 vols. Detroit: Gale Research, 1985.
- Brack, O. M. Jr. and Carlile, Susan. “Samuel Johnson’s Contributions to Charlotte Lennox’s *The Female Quixote*.” *Yale University Library Gazette* 77. 3-4 (2003): 166-173.
- Fielding, Henry. *The Covent-Garden Journal and A Plan of the Universal Register-Office*. Ed. Bertrand A. Goldgar. Oxford: Clarendon Press, 1988.
- Gardiner, Ellen. “Writing Men Reading in Charlotte Lennox’s *The Female*

- Quixote.*” *Studies in the Novel*. 28. 1 (1996): 1-11.
- Isles, Duncan. Appendix. *The Female Quixote, or The Adventures of Arabella*. By Charlotte Lennox. London: Oxford UP, 1998.
- Langbauer, Laurie. “Romance Revised: Charlotte Lennox’s *The Female Quixote*” *Novel* 18 (1984): 29-49.
- Lennox, Charlotte. *The Female Quixote, or The Adventures of Arabella*. Oxford World’s Classics. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Palo, Sharon Smith. “The Good Effects of a Whimsical Study: Romance and Women’s Learning in Charlotte Lennox’s *The Female Quixote*” *Eighteenth-Century Fiction* 18.2 (2005-6) 203-228.
- Small, Miriam Rossiter. *Charlotte Ramsay Lennox: An Eighteenth-Century Lady of Letters*. 1935. Hamden Conn.: Archon Books, 1969.
- Spencer, Jane. *The Rise of the Woman Novelist: From Aphra Behn to Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell, 1986.
- Stone, Lawrence. *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*. 1977. Wiltshire: Penguin, 1990.
- セルバンテス、牛島信明訳『ドン・キホーテ』前編（1）東京：岩波書店、2001。